

## 特集2 CROWN English Communication I・II・III でつける「英語の基礎力」 読解重視型 vs. コミュニケーション志向 の英語教育を考える

慶應義塾大学 霜崎 實



### はじめに

高校での英語授業を「英語で行うことを基本とする」と規定した新学習指導要領が施行されて今年で2年目に入る。この規定については、施行以前から現場の教師の間で期待と不安があったようである。一方では、文法と読解重視の授業から、コミュニケーション志向の授業に舵を切り替えることで、求める英語教育の姿に近づけることができるかもしれない、という期待があった。とりわけ海外留学経験を有する教師や、帰国子女として幼少期から英語に親しんできた教師が、こうした期待を抱くことは自然な成り行きであろう。

しかし、他方では、そこはかかない不安が現場に広がっているという声も聞こえてくる。長年培ってきた読解重視の方法論を放棄して、英語での授業運営に切り替えることからくる不安もあるだろう。また、コミュニケーション志向の英語教育に転換しようとしても、大学入試英語が抜本的に変わらない限り、読解力重視の受験対策を放棄するわけにはいかない、という現実もある。

こうした二つの英語教育へのアプローチをめぐって、英語教育の現場は深刻なジレンマに陥っているのではないか。本稿では、問題の原点に立ち返って、このジレンマを解消する糸口を探してみたい。

### なぜコミュニケーション志向の英語教育か？

最初に、コミュニケーション志向の英語教育と読解重視の英語教育が二者択一の関係にあるのか、という問題について考えたい。もしそうであるならば、高校の英語教育は解決不能な問題を抱えていることになる。特に進学校が読解力養成に重きをおいた受験指導を放棄すれば、塾や予備校に教育の中心がシフトし、高校の教室は二次的な教育の場となっ

てしまうだろう。つまり、高校にとって受験対応型の英語教育を放棄することは現実的な選択ではないことになる。

それでは受験対応型の英語教育が必要とされているにもかかわらず、方向転換が求められているのはなぜか。一つには、巷間言われるように、中学高校で6年間も英語を学んだにもかかわらず、「使える英語」を身につけることができなかつた、という意見がある。これを裏付けるように、日本人の英語力が国際水準よりもはるかに低いという客観的なデータも存在する。2010年のTOEFL (iBT) スコアの国際比較によれば、日本は163か国中135位、アジアの中では30か国中27位と低位置に甘んじている。また、海外の大学・大学院に留学しようという志をもった若者が、年々減少傾向にあるという。こうした現状に鑑みると、英語教育の方向転換が急務であると考えるのも当然かもしれない。さらに、グローバル化に伴い、世界共通語としての英語の重要性が増している現在にあってはなおさらのことである。このあたりの事情については、文部科学省が公にしている『「英語が使える日本人」の育成のための行動計画」(2003) や、「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」(2013) から伺える。

しかし、ここでいったん立ち止まって考える必要がある。コミュニケーション志向の英語教育が導入されたからには、従来の読解重視型の英語教育は全面的に切り捨てられるべきものだろうか。

### 個人的な体験から

ここで、筆者の受けてきた英語教育について述べることをお許し願いたい。あくまでも個人的な経験であり、一般化できるものではないが、それでも問題を考えるヒントにはなると思う。

高校時代に筆者が受けてきた英語教育は、「文法

訳読式」の教育であった。1960年代の後半のことだから、ALTの授業もなければ、インターネットもない。英語母語話者の声を聞く機会といえば、録音テープに限定されていた。にもかかわらず、「使えない英語」を学んでいると感じなかつたのはなぜか。理由は簡単である。

高校時代の教科書は『The Crown English Readers』であった。かなり高度な内容で、中学時代の教科書と比べ、格段に難しかったと記憶している。しかし、辞書を引きつつ単語帳を作り、個人的に入手した英文法書を読んで基礎的な知識をつけ、副読本を自分で購入しては読んでいた。『The Autobiography of Benjamin Franklin』『A Christmas Carol』『The Fairy Tales of Hans Christian Andersen』をはじめ、親日家として知られていた英国の詩人James Kirkupの一連の日本文化論を読んだのもこの頃である。やがて英語の文章を訳読することなく自然に理解できるようになっているのに気づく瞬間があった。次の段階としては、洋書を買って読むことになるのだが、これは予備校時代のことである。通学電車の中で片道10～20頁ほどのペースで読んでいたが、こうなると辞書なしの飛ばし読みで、日本語を読む感覚とかなり近いものになっていた。

その当時の筆者の英語力は、それなりの語彙力とある程度の文法知識、そして英文を比較的スムーズに読み進める程度のものであったと思う。話すことに関しては、誰に教わるともなく教科書の音読を日常的に行っていたが、英会話をするような環境は整っていなかった。ようやく英会話らしきものを経験し、英語の講義を普通に聴き取ることができるようになったのは、大学入学後のことである。また、日常的に英語で意思疎通することにほとんど不自由を感じなくなったのは、大学時代に経験した2年間のアメリカ留学生活においてであった。

振り返ってみるに、高校時代の文法訳読式授業は、筆者の英語力の基礎を作ってくれたのではないかと考えている。文法訳読式授業といえども、読解のためには十分に「使える英語」を学ぶことができたばかりでなく、そこで培った基礎力が後のコミュニケーション能力習得に通じていたのである。このように考えると、読解重視の英語教育を軽視する方向に動くとするれば、それは、諺にあるように、“Throw the baby out with the bath water” ということに

なってしまうのではないだろうか。

### いわゆる「使える英語」とは？

それでは、世間で言うところの「使える英語」とはどのようなものか。いわゆる実用的な英語のことを指しているのだろうか。ESP (English for Specific Purposes) といった特定目的のために特化したものを念頭においているのかもしれない。例えば、旅行英語のように、目的地の入国審査や税関を通過するとき、空港からホテルに向かうタクシーを利用するとき、ホテルでチェックインするときなど、具体的な場面で役立つ英語という意味で「使える英語」なのかもしれない。しかし、この種の実用英語に特化することは、高校英語教育から重要な要素を失わせる結果になりかねない。

さらに言えば、会話文の丸暗記に留まる限り、本当の英語の基礎力が身に付いたとは言えない。山田雄一郎氏が『日本の英語教育』(岩波新書, 2005, pp.124-30) で指摘するように、「読む」「書く」「聞く」「話す」といった観察可能な言語活動の背後には、それを支えている大きな基底能力があるという。言語能力は水に浮かんだ氷塊のようなもので、水面上に現れている部分はわずかで、水面下に大きな塊が隠れているという。英語の基礎力をつけるためには、実は、水面下に隠れている豊かな言語能力を身につける必要がある、という指摘である。例えば、語彙に関して言えば、1,000語を自由に使いこなすためには、少なくともその数倍の語彙力をもっていなければならないことになる。実用英語に特化することは、必ずしも豊かな言語能力の習得を保証するものではない。言語学者ノーム・チョムスキーの言葉を借りれば、言語能力 (competence) の本質は、有限の規則に基づき、無限の文を生成する能力にある。特定の場面に限定された表現を暗唱し、決まり文句を発することができるとしても、それだけでは言語能力を獲得したことにはならないのである。

### 高校英語教育に求められるもの

現在では、筆者の高校時代とは比較にならないほど環境が整っているとはいえ、英語の授業時間が相変わらず不足している現状を考慮すると、高校の英語教育だけで4技能すべてにおいて、バランスのと

れた言語能力を身につけさせるのは、理想とすべき目標にとどまる（もちろん、一部の高校でそのような実績を上げていることを否定するものではない）。魅力的だが実現困難な理想像を描くよりも、実現可能な方法論を模索する方が賢明である。そのためには、「読む」ことを4技能の中心に位置づけたうえで、他の3技能（「書く」「聞く」「話す」）と有機的に関連づける具体的な方法論を創意工夫する道を探ることが現実的な選択となる。

教科書編纂にあつては、適切な題材の選択のもとにコミュニケーション志向の活動を組み込んでいくのが望ましい。英語教育において、語彙や文法の習得が重要であることは言うまでもないが、それだけでは十分ではない。題材内容によって、生徒の知的好奇心を満たしたり、これまでに接したことのないような世界に案内したり、ものを考える新たな視点を提供したりすることも、きわめて重要である。英文を読むことで、環境、歴史、生き方、社会問題などさまざまなテーマについて深く考えることを通じて、新たな世界観を形成することも、英語教育に求められる重要な役割だと言える。

コミュニケーション志向といっても、「伝えるべき内容」を持たない人材を生み出すことが、英語教育の目標ではない。「伝えるべき内容」を持ち、自らの視点で考えていること、感じていることを他者に発信することができる人材こそ、グローバル人材と呼ぶに相応しい。旅行で使える定型表現を暗唱することを一概に否定するわけではないが、それで直ちに「使える英語」が身についたとするのは、言語の本質をわきまえない妄言である。

蛇足ながら付け加えれば、筆者は先に個人的体験に基づいて、読解力重視の英語教育の存在価値について論じたが、このことは従来の文法訳読式授業をそのまま全面的に支持するというではない。文の構造を説明し日本語に訳して終わり、という授業ならば、本当の意味での読解力の養成にはつながらない。自らの視点でテキストを解釈し、批判的に読むことが重要である。つまり、「思考力を促す英語教育」といった観点から、生徒をテキストと向き合わせる必要がある。

『CROWN』シリーズで〈Optional Reading〉を設け、本課の内容に関連した読み物を提示しているのは、自由な発想を促すためでもある。また、〈Food

for Thought〉は批判的な思考力を促すことを目論んだものであり、『Ⅲ』の〈Activities〉において、本課の内容についてモデルとなる意見を提示したうえで、自分の意見を英語でまとめる課題を出しているのも、同様の趣旨からである。つたない英語でもよい、「伝えるべき内容」を英語で発信してはじめて、真の意味でのコミュニケーション志向の英語教育が実現したと言えるだろう。

最後になるが、英語の基礎力を養うためには、「音読」が大切であることを強調しておきたい。同時通訳の草分け的存在である國弘正雄氏は、「只管朗読」ということばを造語し、ただひたすらに音読することの大切さを強調しているが、音読を通じて英語の発音やリズムを体感するとともに、英語の思考回路を自分のなかに取り込むことができるのである。音読によって英語の意味世界が自分のなかで立ち上がってくるようになれば、コミュニケーション能力の基礎作りに向けた確実な一歩となる。

音読はすぐに目立った変化をもたらさないかもしれないが、確かに有効な活動である。野菜作りをする際に、まず畑の土壌作りが大切だと言われる。これを怠ると、野菜はひ弱で、本来の味を欠いたものになるらしい。土壌作りは手間暇のかかる作業だが、これがあって初めて豊かな収穫をもたらすことが期待できるのである。音読はすぐに結果をもたらすことはないかもしれないが、確かなコミュニケーション能力の基礎作りにつながるのである。

## おわりに

本稿では、読解重視の英語教育とコミュニケーション志向の英語教育という二つのアプローチをめぐって、両者が二律背反の関係にあるものではないことを論じた。高校英語教育にとっては、「読む」ことを重視しつつも、他の技能と有機的に関連付けることは十分に可能であるばかりでなく、基礎力を養う意味においても重要である。二つのアプローチをいかに統合していくのかという問題は、現場の教師の熱意と創意工夫にかかっている。その意味で、今ほど英語教育がやりがいのある時代はないのかもしれない。『CROWN』シリーズがそのような目標に向かって、英語教師の皆様の力強い味方となることを願う次第である。